

南北朝期九州地方権力の研究

山本, 隆一郎

<https://hdl.handle.net/2324/4474901>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名	山本 隆一朗					
論 文 名	南北朝期九州地方権力の研究					
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	佐伯 弘次		
	副 査	九州大学	教授	坂上 康俊		
	副 査	九州大学	准教授	岩崎 義則		
	副 査	九州大学	教授	森平 雅彦		

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

九州の南北朝時代史は、南朝勢力の強大化と足利直冬政治権力化が大きな特色である。本研究は、南北朝期から室町初期における地方権力の多様な実態を分析し、南北朝内乱が九州地方に与えた影響と室町時代に向けて内乱が収束していく過程を検討したものである。

第 1 章では、南北朝期の九州全体の政治情勢について検討し、その大きな流れを叙述した。特に、征西府や足利直冬政権等、室町幕府に対抗した勢力の分析から、九州南北朝期政治史の様相を検討した。

第 2 章・第 3 章では、九州南朝勢力の軍事的側面について検討した。第 2 章では、「公家大将」と称された南朝側の人物を検討し、特に懐良親王の九州下向以前から、南朝勢力が九州に基盤を有していたこと、公家大将であった三条泰季は、征西府から一定の独立性を有していたことを明らかにした。第 3 章では、これまで殆ど検討されなかった九州における南朝年号の軍忠状の検討を行った。公家大将と武家では、証判の位置が異なり、その位置づけが異なっていたことを解明した。

第 4 章・第 5 章では、14 世紀中期に急速に勢力を拡大した足利直冬政権の検討を行った。第 4 章では、足利直冬の権力基盤として、その軍事的機構や官僚機構、さらには訴訟制度について解明した。第 5 章では、従来から検討されている足利直冬の知行政策について再検討を行った。敵知行地の闕所化によって新たな所領秩序の構築が図られていくことを明らかにした。

第 6 章・第 7 章では、九州南朝勢力の中心であった肥後菊池氏について検討した。第 6 章では、南北朝後期の当主・菊池武朝が征西府の高官として征西府の運営に参画し、島津氏等との外交交渉を担ったことを明確にした。第 7 章では、九州探題今川了俊の解任後、菊池武朝が肥後において守護としての立場を回復する様相と、室町幕府の秩序の中に入っていく過程を解明した。

以上のように、本論文は、南北朝期九州の各地方権力の軍事的構造や政治的特質を検討し、室町幕府体制が地方において確立していく過程を解明した点において注目される。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）を授与されるのに十分な能力を有することを認めるものである。